

## 地域情報（県別）

### 【福井】生成AIが医師の代わりに相談に応じ、がん患者の心の負担を軽減-宗本義則・福井県済生会病院集学的がん診療センター顧問・院長補佐に聞く◆Vol.1

「医師には話せないこともAIケアボットには話せた」との患者の声が76%に

2026年2月9日（月）配信 m3.com地域版

福井県済生会病院（福井市）集学的がん診療センターは、医師をはじめとする多職種による連携でがん患者を多角的に支えている。現在、センターで実証実験を行っているのが、モニターに映し出されるアバター（仮想のキャラクター）の医師ががん患者の悩みや不安に寄り添う「生成AIの音声対話型ケアボット」。医師の代わりにがん患者と会話をするプログラムが組み込まれており、2026年4月から本格運用する予定だ。AIケアボットの開発に携わった、集学的がん診療センター顧問・院長補佐の宗本義則氏に詳しく話を聞いた。（2026年1月15日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）

▼第3回は[こちら](#)（近日公開）



宗本義則氏

## 福井工業大学との共同研究でAIケアボットのシステムを開発

——2026年3月まで実証実験を行い、その後本格運用される予定になっている、生成AIの音声対話型ケアボットについて、福井工業大学と共同研究を始めた時期や経緯を教えてください。

2024年3月に福井工業大学教授の芥子育雄先生から、がん患者さんの心のケアと情報提供を行える対話型ケアボットを開発し、運用したいという相談を受けたのが始まりです。患者さんを支えることで医療従事者の負担を減らしたり、患者さんに寄り添って精神的な不安を解消するというのが目的です。

実証実験は3段階の評価で進められました。2024年7月に医療従事者によるレビューを10例、2024年9月に一般市民による体験を27例、2024年12月には外来患者さんを対象とした1回目の臨床試験を16例行いました。得られたデータを分析し改良すると同時に、「生成AI×コード」、「LLMワーキング」、「Ethical AI ワーキング」という3つのワーキンググループが立ち上がりました。

私は技術・倫理・現場の視点から「Ethical AI ワーキング」グループのメンバーとして活動。ケアボット使用時の倫理・安全性ガイドラインの策定や、患者データの保護、緊急時の対医師との情報共有などを担当しています。2025

年12月に2回目の臨床試験として21人のがん患者さんにご参加いただき、大幅に改良したシステムの効果を検証しました。



患者による臨床試験

#### —AIケアボットのプログラム内容や特徴について教えてください。

音声認識と音声合成には、Microsoft Azureの「Azure Speech Service」を使っています。対話エンジンは、OpenAIが開発した最新世代のAIモデル「GPT-5 Chat」を、Azure OpenAI Serviceを通じて利用しています。またアバター表示には、Live2Dによるリアルタイム表情運動を使っています。医療情報のソースとしては、がん情報サービスや、院内のクリニカルパスの情報などを統合しています。

これまでのチャットボットは「質問に答えるだけ」でしたが、今回のケアボットは、まず患者さんの言葉に共感し、その気持ちを受け止めてから情報を伝えるという設計にしています。心理的アプローチを組み込んでいる点が大きな特徴ですね。

#### —医師の代わりにがん患者と会話するAIケアボットを導入するメリットは何でしょうか。

医師と患者さんの両方にメリットがあります。医師からみると、本来はゆっくり患者さんの悩みを聞いて解決・解消したいのですが、そういう時間は取れないのが現状です。「3時間待ち・3分診療」が当たり前の状況の中、医師や他の医療従事者の代わりにAIケアボットが患者さんの相談をしっかりと聞いてくれますから、医師の働き方改革の一環にもなります。

また患者さん側からみると、2025年12月の臨床試験で約3分の2の患者さんが「医師には話しにくいことをAIには相談できた」と回答しています。AIが最初の相談相手となることで、その後の医師との限られた診察時間をより有効に使えるという流れが作れると思います。AIは、何度聞いても何時間かけても嫌な顔をせず、疲れることもありません。臨床試験の結果をPOMS2という標準化された心理尺度で検証したところ、5つの指標全てで統計的に有意な改善が確認されました。これについては、芥子先生が英文論文として発表する予定です。

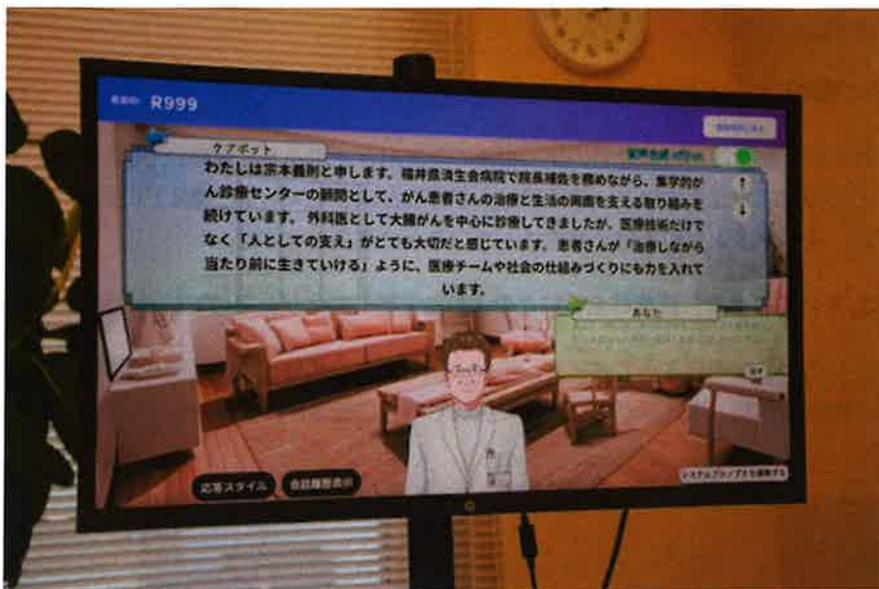
## がん診療に長年携わってきた宗本氏がアバター医師のモデル

#### —アバターの医師は宗本先生がモデルですが、宗本先生が選ばれた理由は何でしょうか。

2024年12月の臨床試験までは、キャピキャピした感じの若い女性キャラクターを使っていました。すると「信頼感がない」「不安になる」「説明が軽い」といった声が非常に多かったです。そこで2回目の臨床試験では、私が長年が

ん関係の仕事をしていたということで、芥子先生から提案があり私がモデルに採用されました。やや照れもあり、不思議な気持ちでしたね（笑）。

このアバターには私の個人情報（生まれ・年齢・趣味・考え方など）も入力しており、よりリアルに近づけてあります。個人情報他に漏れないか心配でしたが、芥子先生には構造上問題ないと保証してもらっています。患者さんは本当に私と話しているような感覚になるとと思います。



AIケアボット（医師が宗本氏のアバター）

#### ——開発で苦労したことはありましたか。

高齢患者さんの音声認識はかなり難しかったです。患者さんがゆっくり話すと途中で切れてしまったり、その間入力ができずにAIが考え込んでしまうことがありました。また、「死にたい」「自殺」といった不適切ワードへの対応も大きな課題でした。ブロックするのかどうか、そのあたりは1年かけて調整しています。共感と情報提供のバランスをどう取るかという点も難しかったと芥子先生から聞いています。

#### ——患者とAIケアボットはどのような会話をするのでですか。

「治療の副作用が心配です」「家族にどう伝えたらいいですか」「入院の準備は何が必要ですか」など本当に何でも、食事のこと、痛みのこと、お金のことなども含め、患者さんが困っていること全てに答えます。AIはまず「それは心配ですね」と患者さんの気持ちを受け止めてから、がん情報サービスや院内の情報に基づいて説明します。診断や治療方針の判断は行わず、心理的サポートと情報提供に特化しています。

#### ——AIケアボットと会話をした患者からはどのような声がありましたか。

2024年12月までの初期段階では、レスポンスが遅くて聞いているこちらがストレスになるという声が多かったです。2025年版では反応が非常に速くなり、すぐ返ってくるので評価がかなり良くなりました。答える前に、必ず共感の言葉を入れるようにプログラムしている点も好評です。

「先生に言えないことも話せた。安心になれた」「気持ちが出せて涙が出た」「宗本先生の顔なので安心して話せた」といった声があり、アンケートでは、悩み解消が5点満点で4.43、信頼性が4.24、不安解消が4.24、推薦意向が4.05と高い評価をいただいています。

#### ——現在までの手応えはどうか。

先ほどお話ししたように、POMS2でネガティブ5指標全て有意改善、総合的な気分状態は63.2%改善という結果は想定以上です。特に「医師に話せなかった悩みを相談できた」が2024年の35%から2025年は76%に向上したのは大きな手応えを感じています。

## 本格運用に向けてさまざまな課題も

4

—今後の課題は何でしょうか。

本格運用に向けて、どういう体制で運用するかが課題です。現状はがん相談員がAIケアボットに付きっきりですが、将来的にどう自立させていくのか。また、倫理面や法整備もまだ十分ではありません。特に自殺念慮が出た場合にどう医療者が介入するかは、引き続き検討が必要です。

今後は、さらなるサンプルサイズの拡大（今後30人追加予定）、長期的な効果の検証、他施設への展開時の汎用性の検証も必要であると考えています。

—2026年4月からはどのように運用していくのですか。

まだ具体的に決まってはいませんが、患者さんには通常のがん相談の前にAIケアボットに相談していただき、その後のがん相談員が対応・補足。どこの科につなぐのかという役目は人が行うというイメージで考えています。ですからAIで終わる患者さんもいますし、その後に人が引き継ぐ患者さんもいるということですね。

—今後、AIケアボットが拡大していくことで、医療界全体にどのような影響や変化があるのでしょうか。

これから医療界でも当然、AIがいろいろな面で入ってきます。いかにAIと人が共創して良い医療を展開していくかが今後の課題になっていきます。病院の体制・構造などそれぞれの病院でのAIの位置付けを模索していく必要があると思いますね。



福井県済生会病院

◆宗本 義則（むねもと・よしのり）氏

1984年、金沢大学医学部卒業。金沢大学附属病院、国立東静病院、石川県立中央病院などを経て福井県済生会病院に。同院副院長、集学的がん診療センター長を歴任し、現在は集学的がん診療センター顧問・院長補佐。日本外科学会認定外科専門医・指導医。日本大腸肛門病学会認定大腸肛門病専門医・指導医。日本消化器病学会認定消化器病専門医・指導医。日本消化器外科学会認定消化器外科専門医・指導医。日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医。日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医・指導医。日本消化器がん検診学会認定医・指導医・総合認定医。日本がん治療認定医機構がん治療認定医。日本栄養治療学会認定医。日本腹部救急医学会腹部救急教育医・腹部救急認定医。日本消化器外科学会専門医制度修練施設指導責任者。日本医師会認定健康スポーツ医。一般社団法人がん哲学外来理事長。

【取材・文＝荒川慎司（写真は本人提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索



地域情報（県別）

【福井】多職種による有機的・効果的な診療を行う集学的がん診療センター-宗本義則・福井県済生会病院集学的がん診療センター顧問・院長補佐に聞く◆Vol.2

年の離れた外科医に憧れ、同門の金沢大学第一外科に入局

2026年2月16日(月)配信 m3.com地域版

医師をはじめとする多職種による連携で、がん患者を多角的に支える福井県済生会病院（福井市）集学的がん診療センター。センター顧問・院長補佐の宗本義則氏は、センターを立ち上げ初代センター長を務めた経歴を持っている。今回は、集学的がん診療センターを設置した経緯や活動内容を中心に宗本氏に話を聞いた。（2026年1月15日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら（近日公開）



宗本義則氏

自分の手術でがんを治せるのが魅力で消化器外科を選んだ

—宗本先生が医師を目指すようになった時期や経緯を教えてください。

もともと人と話をするのが好きで、小学校の文集では「小学校の先生になりたい」といったことを書いていました。中学生になると「もっと人の役に立ちたい」という気持ちが大きくなり、医師という仕事に興味を持つようになっていました。身内に医師はいませんし特別なきっかけもなく、自然な流れで医師を志したという感じです。

—金沢大学医学部時代に思い出に残っていることは何でしょうか。

学生時代は好きなサッカーばかりやっており、大学でもサッカー部で活動していました。正直、学問は最低限で、ぎりぎり単位を取るという感じでした。試験前になると優秀な友人のノートが出回るので、そのコピーをできるだけ集め、情報戦で何とか乗り切って留年せずにストレートで卒業できました（笑）。

当時の金沢大学は金沢城の中にある大学として有名で、それに憧れて全国各地から優秀な仲間が来ていました。大学時代の友人とは今でも仲が良く、定期的集まって昔話で酒を飲むといういい時間を過ごしています。私にとっては、とても重要で意義のあった学生時代だと思っています。

—消化器外科を選んだ理由は何でしょうか。

サッカー部の先輩に外科系の先生が多く、その影響が一番大きかったです。外科自体にもともと興味があり、消化器外科、脳外科、整形外科などを視野に入れていました。20歳以上年の離れた外科の先生に非常にかわいがっていたことで、「こういう先生になりたいな」と思い、同門の金沢大学第一外科に入局しました。

第一外科は大講座制で、心臓外科、消化器外科、血管外科など、いろいろな外科を経験できる医局でした。その中で、自分の手術でがんを治せるという点に強い魅力を感じ、消化器外科を選びました。私が研さんしていた国立東静岡病院や石川県立中央病院では、胃がんや大腸がんなど消化器がんの患者さんが多かったのも理由の一つです。

## トモセラピーやサイバーナイフなど高度な放射線治療を提供

—現在の福井県済生会病院で集学的がん診療センターを立ち上げた経緯を教えてください。

私は金沢生まれ金沢育ちなので、福井県済生会病院に赴任した時は、いつかは金沢に戻るつもりでいました。けれども福井の地や病院が合っていたのか、そのまま福井に残り、福井人となり35年になりました。

この間は一貫してがん診療に携わっていました。主に大腸がんが中心で、大腸がん診断・治療・手術・抗がん剤治療・緩和と行ってきました。しかし、医師一人だけの力では限界があり、専門家集団のチーム医療が必須と感じていました。

そこで、チーム医療の場として2007年にまず、がん診療推進センターを作りました。その後、新棟が完成し、2011年に集学的がん診療センターを立ち上げてセンター長に就任しました。医師だけでなくいろいろな職種が集まり、なおかつ有機的に効果的に動かねばならないという思いから、「集学的」という言葉を使用してセンターを立ち上げました。



福井県済生会病院

—集学的がん診療センターの活動内容を教えてください。

5つの柱を中心に活動しています。まずは「質の高いがん診療」。PET、個別化治療、遺伝子によるテーラーメイド、緩和ケア、トモセラピーやサイバーナイフなどの高度な放射線治療、治療ディジジョンツリーの作成などです。

2番目は「患者さんと家族のサポート」です。センターとして非常に力を入れているところであり、がん相談室、がん哲学外来、メディカルカフェ、がん患者の就労支援、がんの親の子ども支援（CLIMB）など、幅広いサポートを行っています。

3番目は「院内がん情報の集約」、がん登録やホームページの充実です。4番目は連携バス、病診連携、在宅支援など「がん診療の地域連携」。そして5番目は「臨床研究および教育（臨床研究・講演会、患者教育）」です。



集学的がん診療センター

## センター長時代はメディカルスタッフが活躍できる場を創出

——センター長時代にはどのようなことに取り組んだのでしょうか。

医師以外のメディカルスタッフが活躍できる場が必要だと考え、その提供に力を入れていました。医師はいろいろな場で自身の活動や実績、強味をアピールできますが、看護師や薬剤師、ソーシャルワーカーなどのメディカルスタッフはその場がなかなかないと感じていました。非常にいい仕事をしているのに周りの人たちが認識していなかったり、褒められなかったりでモチベーションが上がらない状況であったと思います。

そこで、定期的開催している市民公開講座では、前半はメディカルスタッフの実績や仕事を発表し、後半に著名人や芸能人の講演などを行うようにしました。すると、メディカルスタッフのモチベーションが上がり、さらなる活躍につながるという相乗効果が得られました。

——集学的がん診療センターの現在のスタッフ体制を教えてください。

私は現在、顧問（スーパーバイザー）として運営に関与しており、医師8人、看護師4人、他の部署の6人、事務8人の計26人です。集学的がん診療センターは大きな建物があるわけではなく、診療は各科でいろいろ行ってもらい、データや情報を一元化し、その心臓部を集めて運営する形になっています。

### ◆宗本 義則（むねもと・よしのり）氏

1984年、金沢大学医学部卒業。金沢大学附属病院、国立東静岡病院、石川県立中央病院などを経て福井県済生会病院に。同院副院長、集学的がん診療センター長を歴任し、現在は集学的がん診療センター顧問・院長補佐。日本外科学会認定外科専門医・指導医。日本大腸肛門病学会認定大腸肛門病専門医・指導医。日本消化器病学会認定消化器病専門医・指導医。日本消化器外科学会認定消化器外科専門医・指導医。日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医。日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医・指導医。日本消化器がん検診学会認定医・指導医・総合認定医。日本がん治療認定医機構がん治療認定医。日本栄養治療学会認定医。日本腹部救急医学会腹部救急教育医・腹部救急認定医。日本消化器外科学会専門医制度修練施設指導責任者。日本医師会認定健康スポーツ医。一般社団法人がん哲学外来理事長。

【取材・文＝荒川慎司（写真は本人提供）】



## 地域情報（県別）

### 【福井】がん患者に対話を中心とした医療を行うメディカルカフェを毎月開催-宗本義則・福井県済生会病院集学的がん診療センター顧問・院長補佐に聞く◆Vol.3

今後はAIとの共創で良い医療を提供することが重要になる

2026年2月23日（月）配信 m3.com地域版

医師をはじめとする多職種による連携で、がん患者を多角的に支える福井県済生会病院（福井市）集学的がん診療センター。センター顧問・院長補佐の宗本義則氏はセンター長時代の2011年、がん患者向けにカフェを開いて対話を中心とした医療を行う「メディカルカフェ」を立ち上げ、現在も継続している。今回は、集学的がん診療センターの運営状況やメディカルカフェの詳細、自身の今後の展望などについて宗本氏に話を聞いた。（2026年1月15日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



宗本義則氏

## がん手術は年1000件、がん患者からの相談は年1000件前後

——福井県済生会病院集学的がん診療センターでは、質の高いがん診療や、患者やその家族のサポートなどを行っています。がん診療の患者数や手術件数など教えてください。

がん患者さんは年間1400～1500人です。がんの手術件数は年間約1000件で、放射線治療が370件、抗がん剤治療が延べ6000件です。当院はサイバーナイフやトモセラピーなどの放射線治療が充実しているため、最近は放射線治療が伸びています。特にサイバーナイフ（2023年に福井県で初めて導入）によるがん治療はメリットが大きいので、院外の病院の紹介も非常に多く、放射線治療は今後の目玉になっていくだろうと思います。

■ 地域がん診療拠点病院

## 集学的がん診療センター

Multidisciplinary Cancer Care Center

がん相談支援センター

Cancer Care Consultation Center

■ 福井県肝疾患診療連携拠点病院

## 肝疾患センター

Liver Disease Care Center

肝疾患相談支援室

Liver Disease Care Consultation Room

集学的がん診療センター

—がん患者からさまざまな相談も寄せられるそうですが、件数や相談内容を教えてください。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行前は年間2000件弱でしたが、最近は1000件前後です。最も多い相談内容は、医療費・生活費などお金のことで、34%を占めます。次に症状や副作用に関することが27%と続きます。



福井県済生会病院

## メディカルカフェを15年間、計165回開催

—患者とその家族のサポートとして、集学的がん診療センターで毎月第1金曜日にメディカルカフェを開いています。2011年から始めた経緯を教えてください。

順天堂大学名誉教授の樋野興夫先生が提唱されている「がん哲学外来」を当院でも取り入れたのが2011年です。樋野先生は、がん患者さん向けにカフェを開いて対話を中心とした医療を行うことを推進されていました。その取り組みがとても興味深かったので、2011年に樋野先生をお招きし、第1回のメディカルカフェを開催。その後15年間継続しており、初回から通算して計165回開催されました。



メディカルカフェ

—メディカルカフェではどのようなことを行っているのですか。

メディカルカフェは、がん患者さんが「がんであっても笑顔で人生を生き切ることができるように支援する」というのが概念です。がん患者さんに寄り添うことが大前提で、出会い・対話・支援・力を引きだすことが目標です。

がんで悩んでいる患者さんやご家族と医療者がお茶を飲みながらじっくり語り合う個別形式の「がん哲学外来」と、がん患者さんが集まって集団で行うカフェ形式の2形態で運営しています。集団で行うメディカルカフェでは、いろいろな講演や就労支援の相談会、脱毛ウィッグ相談会も同時に開催しています。カフェに参加した方がそのまま就労支援やウィッグの相談もしやすい仕組みです。メディカルカフェは現在、全国130カ所ほどで開催されているようです。

—メディカルカフェを開催することによる成果や参加者の声を教えてください。

患者さんは暗い顔でカフェに来られるのですが、終わった後はにこやかな顔でお帰りになられているのを何度も見えています。

また、実際にカフェの効果を計るデータを取ったこともあります。「がん患者の心配評価尺度（BCWI）」では、カフェに参加することで体や将来、社会や対人関係の不安がどう変化するかを見るのですが、カフェに参加した後は有意に改善しています。特に、男性より女性でより強く相関があると出ています。カフェのような人と関わりを持つ場所、自分をさらけ出せる場所がいかに少ないかということでしょうね。

—宗本先生は現在、消化器外科で木曜午前の外来を担当されています。患者数や年代、多い症例など教えてください。

現在は私に紹介がある方と、以前から担当していた方を診ており、週1回で20人弱です。多くはがん関係の患者さんですが、以前からIBD（クローン病や潰瘍性大腸炎）を診療していましたのでIBDの患者さんも多いです。がんの方は高齢者、IBDは若年者が多いです。



診療中

## がん哲学外来カフェが無いのは13県、全県設置を目指す

——2022年、一般社団法人がん哲学外来の第2代理事長に就任された経緯を教えてください。

先ほどお話しした樋野興夫先生が、がん哲学外来の創始者で初代理事長でした。私はその頃から樋野先生にいろいろ教えていただき、弟子として活動してきました。2022年、樋野先生の後を受けて第2代理事長を拝命。樋野先生は名誉理事長として現在も全国でご活躍されています。私も少しずつですが、全国での講演や催し物に参加しています。

——理事長として現在、どのような取り組みを行っているのですか。

樋野先生からのご要望もあり、全国津々浦々にがん哲学外来のカフェを設立する取り組みを進めています。まだ全国の13県でがん哲学外来カフェがなく、全ての都道府県にカフェがあるようにしたいと思っています。また、運営する方々の教育なども含め、カフェそのものの質を上げるようなサポートも重要になってきていますから、そうしたことにも取り組んでおり、今後も力を入れていきたいと考えています。

——宗本先生自身の今後の展望を教えてください。

病院内では、がんに関する集大成と次世代への引継ぎを中心に業務を行っています。がん哲学外来に関しては、さらなる全国展開が必要だと思っています。がん哲学外来のコンセプトはいかなる時代になっても必要であり、今後さらに重要になっていくことは間違いありません。がん哲学外来を広めるべく、その時代に合った方法や手段を今後も模索していきます。

——最後に、読者に向けてメッセージをお願いします。

今後AIは、われわれ医療者も理想的な医療を展開する上で必須のアイテムになってきます。AIを良きパートナーとして捉え、AIと人がいかに共創し、良い医療を作って患者さんに提供していくかが重要になっていくと思います。

私自身もm3.comの愛読者として、全国の先生方の素晴らしい取り組みやご意見など拝見し、参考にしています。Vol.1でわれわれが取り組んでいるAIケアボットのお話をさせていただきましたが、AIに関して少しでも先生方の参考になればうれしいですね。

### ◆宗本 義則（むねもと・よしのり）氏

1984年、金沢大学医学部卒業。金沢大学附属病院、国立東静病院、石川県立中央病院などを経て福井県済生会病院に。同院副院長、集学的がん診療センター長を歴任し、現在は集学的がん診療センター顧問・院長補佐。日本外科学会認定外科専門医・指導医。日本大腸肛門病学会認定大腸肛門病専門医・指導医。日本消化器病学会認定消化器病専門医・指導医。

日本消化器外科学会認定消化器外科専門医・指導医。日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医。日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医・指導医。日本消化器がん検診学会認定医・指導医・総合認定医。日本がん治療認定医機構がん治療認定医。日本栄養治療学会認定医。日本腹部救急医学会腹部救急教育医・腹部救急認定医。日本消化器外科学会専門医制度修練施設指導責任者。日本医師会認定健康スポーツ医。一般社団法人がん哲学外来理事長。

【取材・文＝荒川慎司（写真は本人提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

